

TURN JOURNAL

ターンのジャーナル

特集

AUTUMN 2020 ISSUE 05

距離と交流

CONTENTS

目次

- 距離って何だ？ あなたと私のディスタンス ——— 2-4
 - 公共性への距離 — 複数性の実現のために 百木 漢 [大学研究員 / 社会思想史]
 - 他者との距離はなぜ生まれ、何を生むのか 上野吉一 [名古屋市東山動植物園企画官]
 - 遠くて近い 近くて遠い この世界を共にするまだ見ぬあなたと 小澤いぶき [児童精神科医]
- コロナ禍でも居場所を作り続ける理由 久保田翠 [認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ代表理事] ——— 5
- 気持ちの距離は球体の上にある 日比野克彦 [TURN監修者 / アーティスト] ——— 6-7、12
- 対面信仰 木村大治 [人類学者 / 文化人類学、宇宙人類学、コミュニケーション論] ——— 8
- インタビュー 距離を超えて — 言ろうの文化と出会う
 - 富塚絵美 [アートディレクター / パフォーマー]、佐藤慎也 [建築家] ——— 9-11

PURPOSE OF

今号の趣旨

昨今のコロナ禍では、人と距離を取ることが求められる。行政による「3密を避ける」「ソーシャル・ディスタンス」の号令のもと、人との距離は2メートル以上あけ、会話も最小限に。交流はオンラインベースになり、距離を超えたコミュニケーションが必要とされる。この物理的な距離が心の距離にどう影響するのか、漠然とした不安を感じることもある。

一方、介護や介助の現場では、距離を取ること自体が難しい人もいれば、心に病を抱え、物理的・精神的に距離を保つことのできなりの育んできた人もいて、「ソーシャル・ディスタンス」の一般論は必ずしも馴染まない。規定の「距離」の枠組みに人を押し込めようとする「差別や偏見、分断」が生まれているようにも見える。

富と力を求めて自然を変え、格差を広げてきた人類。コロナ禍で、世界が同じ状況を共有し、人々との様々な「距離」が可視化され、他者への無関心や無理解が浮き彫りになった。間違はなく、自然との距離についても考え直す時期に来ている。

これまでの形で、人と人とが直接出会い、場と時間を共有することが困難となった現在、「交流」をキーワードに活動を続けてきた「TURN」が、どんな「つながり」に可能性を見出せるのか。物理的には距離を保ちながら、他者への想像力を育む術とは？ また、意見や立場の違いによる距離の自覚は、「つながり」への契機になりうるのか……。 「距離」と「交流」、その背後にある「つながり」について考えてみたい。

(永峰美佳)

TURN JOURNAL

とは？

障害の有無、世代、性、国籍、生まれ育った環境などの背景や習慣の、違いを超えた出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクト「TURN」。一人ひとりの異なる特性を掘り起こし、あらゆる意識や枠組みを更新していくことを目指しています。「TURN」の取り組みとそれらの意義を、様々な角度から伝えていく定期刊行物『TURN JOURNAL』は、これまで冊子という形で、年に1~2回発行してきました。2020年度は、日々変化してゆく「TURN」とそれらを取り巻く世界について、その時々々の声や状況を伝えるメディアとして、装いも新たに、夏号に続き、秋・冬・春と定期的に発行していきます。

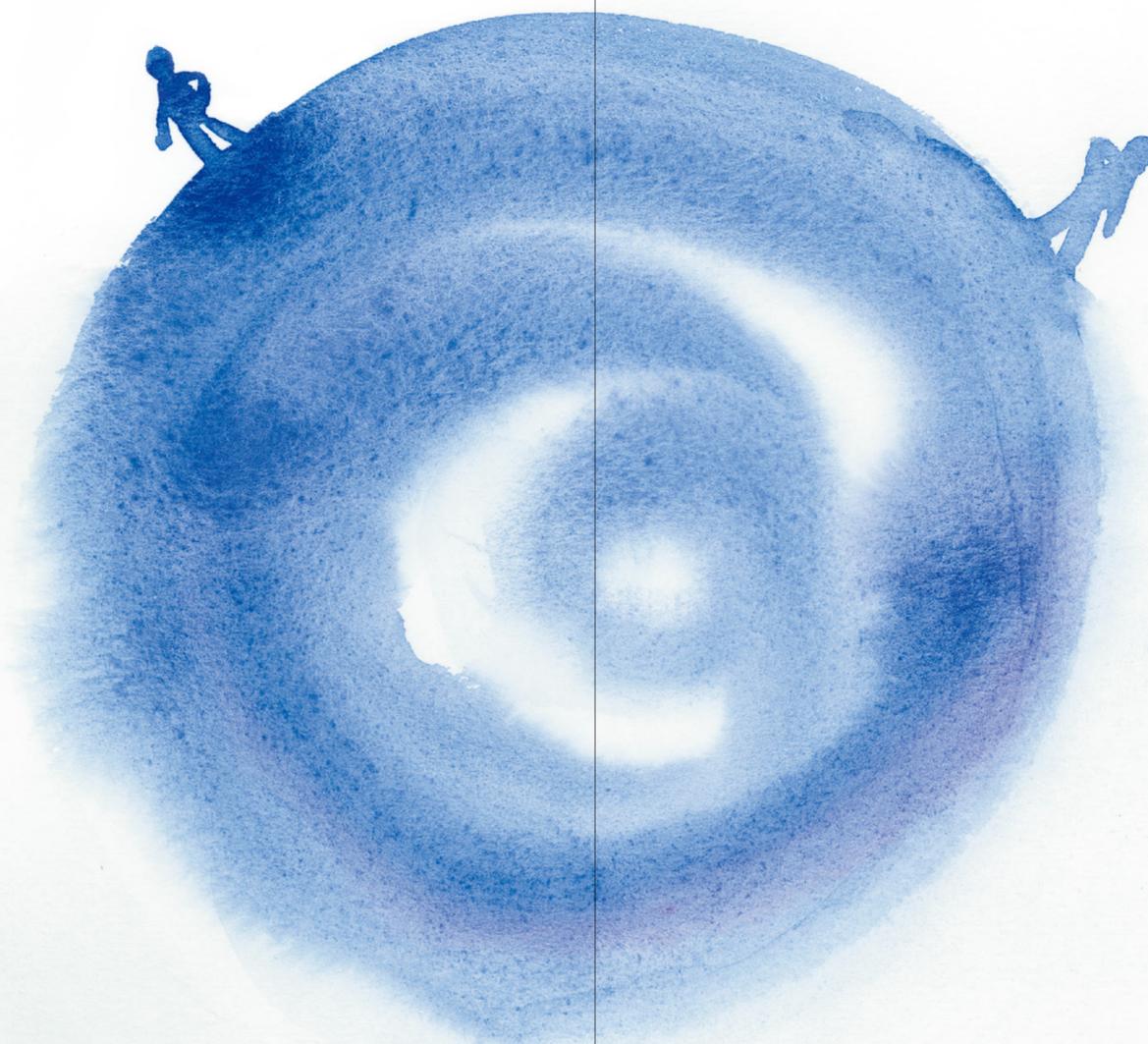
文化でつながる。未来とつながる。

Tokyo Tokyo
FESTIVAL

<https://turn-project.com/>

TURN公式ウェブサイト

A



HIRANO
2020.10.4

対面信仰

木村大治（人類学者／宇宙人類学、コミュニケーション論）

やっぱり対面じゃないと、だめ？

対面して話さなくては辛い。Zoomの「ビデオ通話」は「顔」は被れる。……「コロナ下でよく聞かれる嘆きである。私も同感だ。Zoomの飲み会では、発言をせがまれているような気がして落ちついて飲めない。ネット越しに議論していても、何か伝わりづらいものがあるように、電車で乗って相手の目を見たいな。」

「変な」コミュニケーション

「変な」コミュニケーションとは、たとえばこんな具合だ。ロシア民主共和国のボンガ下の人びとの間に、現地語「ボナン」と呼ばれる話じ方があり、壮年から老年の男性が、村の中の広庭で大声で語りはめる。これだけ書くと「演説」と呼んでいいのではないかと思われるだろうが、奇妙なのは、その周りに聞き手が見当たらないことである。家の中座っている人たちに、たぶん声が届いているはずなのだが、誰もそれを聞いてる素振りを見せない。私自身は、この話じ方に強い違和感を覚えた。しばしば、何か大きな事件でも起こったのではないかと、家を飛び出し様子を見たりした。近くにいる人に「あれは何を言っているんだ？」と尋ねるのだが、返ってくるのは「ああ、あれは小さな

「コミュニケーションをする上で、対面で人と会うことだけが理想なのだろうか。

「一緒にいるという共感ほぐらる生まれるのか。かつて宇宙人とのコンタクトについて論じた筆者が、未来の「交流」の可能性を説く。

問題を話しているんだよ」といった素直な答えだ。たとえば、自分の孫が学校に行きたがらない、というた愚痴を大声で喋りだしているらしい。そう言われても、どうして怒っているんだろう、そんな大声のボナンの中で、私は年間を過ごしたのだ。

またカメルーン共和国のバカビゾーの村では、ボンガ下のように「被れる」ということではないのだが、やはりどうしてもなじめないコミュニケーションに出会った。たとえば我が家の家やってくる椅子にどうやら座る。しかもその後、語りかけてくることもなく、何十分前もせずに座っているのだ。もともと気配の薄い人たちのので、それほど迷惑でもないが、やはり気になる。たぶん「バカ」が欲しいと聞いたこと、だからそれが気に入らなくて座っているのだ。欲しいならどうして言えないの？と、私も考えてしまう。しかしそれが彼らのやり方なのだ。

ここで言いたいのはいくつかの事例がZoomのやり取りに似ている、ということではない。問題は、私にとって違和感しか感じられなかった「コミュニケーションが、土地の人びとにとっては長い歴史をもった、ごく自然なやり方だ」ということである。文化が違う以上、それを「変な」とか「被れる」と形容するたくなるのは仕方ないことかもしれない。しかし、「本来の姿ではない」「自然なものではない」といった価値判断をもって評するのは違うだろう。と考えるのである。このように、価値判断を外して異文化を見る態度は、文化人類学では「文化」相対主義と呼ばれている。その人たちはその人たちの「別種のやり方」があるのだ、とこのことを納得してかかる姿勢だと言ってもよい。私はこの態度こそが、文化人類学が人間の知にもたらした最大の貢献なのではないかと思っている。

「聴覚」を基盤にした「一緒にいる」感覚

「ロシアの話に戻ろう。対面のコミュニケーションこそが「自然な」よいものだ」という考え方の「何を」を「対面信仰」と呼ぶことには、同様に相対化できるのではないかと、私は考えている。実はそれでいいやり方もある。それらの方ちやといううちに「自然だ」と思えるようになるかもしれないのである。

実際、対面ではなく、たとえば聴覚を基盤として「一緒にいる」という感覚（私は「共在感覚」と呼んでいる）を作り上げている事例はいくつもある。たとえば、文化人類学者のクリスティアン・ヘリエルによる、ホルネオ島のダヤクの記載である。ダヤクの人びとは「ロングハウス」と呼ばれる長大な高床式の家を作。ヘリエルはそこに住み込んだとき、宿女の女性が、いつもくくくくひびきとを言っているのを見た。それは「西歐人にとっては控えめに言っても異様なもの」だったという。ところが二度目の調査のときヘリエルは、それがひびきとではなく、女性は、ロングハウスの仕切りを横断して他の部屋から聞こえてくる質問に回答しているに気づいたのだ。ヘリエルは「視覚中心主義（visualism）」とはまったく異なるものである」と書いてい。

また私自身のボンガ下の調査でも、人びとはボナンの大きな声に媒介された、独特な共在感覚をもっていることが明らかになった。村人たちは朝はじめて集会小屋で出会う時も「おはよう」というたぐいの挨拶をしないのである。聴覚的なつながりによって、離れていても、挨拶が抑制されるらしいの「一緒にいる」という共在感覚をもっているのだ、と私は解釈した。

遠くへの相手と「一緒にいる」と思うとき

もちろん、聴覚よりも視覚の方が、伝えられる情報量が圧倒的に多いことはたしかである。しかし、情報量が多ければ密接なコミュニケーションができるのだろうか？この点については再考の余地がある。私の体験をもつてい「書」。最初に就職した福井大学では、1992年当時、「JINTE」と呼ばれる大学・研究所間のネットワークが稼働していた。私は、関西の企業の研究所に勤めていた妻、当時はまだ結婚していなかったが、とメールでも取り取り

することを試みた。UNIX OSの一種、端末の日本語変換機能、Windowsが動きがなかった。メールは英文がローマ字表記で書けなかった。How nice it is to communicate with you”とか、「kitakushita”とか、そんな感じで感じの文面だった。しかし、メールを出すときに数分は返事が来た。それにまたすぐに返事を返す。そういったとき私は、彼やと「一緒にいるなあ」という感覚をもったのである。

このように、アルファベットの羅列という、視覚的な取り返すに比べて極端に乏しい情報量の通信でも、それなりに豊かな共在感覚が実現されたわけだが、このときは、「コミュニケーションにおけるダイミツの重要性を示している。次のような思考実験をしてみよう。システムAとBが「コミュニケーション」しているとき、A、Bそれぞれの内部での通信（処理）の速さ「AとBの間の通信の速さ」を比べてみる。前者が後者よりもずっと遅ければ、AとBでそれぞれ別のプロセスが走っていると言っているが、両者の速さが近くなるといって、AとBはそれぞれ別のシステムでなく、一つのシステムとして考えなければならなくなる。つまり、レスポンスの遅延は非常に早ければ、うまくすれば、共在感覚は実現できるのである。

メールの例で言うと、じつは考えてみると、た返事を出さない、それは私の考え「のだが、私の考え、がまとまる前に相手からの通信が来て、それでまた考えが進んでいくなら、それはすでに「私の考え」ではなく「私たちの考え」ということになるだろう。

かつて電話も非人間的なメディアと言われた

以上、対面している状態こそが真正な「コミュニケーション」であるという「信仰」を打破すべく議論してきた。しかし本当に、Zoomなどのネットワーク「コミュニケーション」に「別種の自然さ」は生まれるのだろうか？そう思った、新しい文化とでも呼べるもの成立は、一朝一夕にはいかないだろうが、最後にも一つ、楽観視の根拠となるエピソードを紹介しておこう。

福井大学に勤務していたとき、「コミュニケーション」研究という共同講義に参加していた。そこでテキストとして取り上げた論文に、電話「コミュニケーション」に関するものがあった。ここでは、電話

目が見えない、耳が聞こえない距離を超えて——盲ろうの文化と出会う

インタビュアー 富塚絵美（アートディレクター／パフォーマー）

佐藤慎也（建築家）

聞き手＝森司 構成＝杉原環樹

2020年夏の「TURNフェス」に参加する予定だった富塚絵美と佐藤慎也。東京盲ろう者友の会との交流を通じて、お互い作品を上演する試みだった。しかし、「コロナ禍でTURNフェスは中止。その後、ワークショップや「TURNラボ」での活動を続けるなかで見えてきた「盲ろうの文化」とは、

—— 今回の作品の出発点にはどんな関心があるのでしょうか？

富塚 TURNフェスは初回から参加していて、2017年のTURNフェス3で行った、音声言語を禁止する「光の広場」や、盲ろう者へのヒアリングを踏まえて昨年TURNフェス4で実施した《Bolt Room——盲ろう文化の手》で発表した《光を抱く部屋》での共同展覧「部屋」など、盲ろう者や盲ろう者の方とは過去にも何回か協働してきました。そうしたなか今回、東京盲ろう者友の会（以下、「友の会」と）一緒に何かをできないかと思ったのは、生まれつきの盲ろう者で、「友の会」で理事も務める森敦くんとの出会いが大きかったです。私私、盲ろうの人のなかに「盲ろうの文化」と呼ぶべきものがあると感じていて、それに触れたいと思っているのですが、彼はその存在を私に確信させてくれた人でした。特に印象的だったのは、昨年の「共同展覧」に向けて彼にインタビューしてもらったときに聞いた森くん「暇なとき、その辺の紙で袋のようなものを折る」とがあるという言葉でした。それは私の考える文化的な時間のイメージとリンクして、盲ろうの人の人生でもあった時間の積み重ねがあるのだと感じさせました。

—— 「盲ろうの文化」は？

富塚 「それが袋になっっているからか？は分からないんですけどね」と言ったときの、森くんの何かを

想像するような嬉しそうな表情。それを見て、そこには何かがあると感じました。それがたのづまらない作業なら、記憶も残らないし、繰り返しを繰り返すよね。彼は折ったものを見ることはできませんが、折りながら考えを整理したり、何かの想いを浄化したり、きつとそこには彼にとつて有意義な時間があるのだと思います。私は、一見ムダにも思える、そうした時間の積み重ねが、その人の生きる力や文化、人生をなっていると考えています。

私は普段、様々な場所で行っているのですが、ワークショップを行っているのですが、その活動の動機にも、アルミホイルが体を解放させて創造的な行為を導くような、手が触れたが不思議な感覚があるんです。森くんの話を聞いたとき、その感覚を共有できるかもしれないと思いました。障害の有無で分けるのではなく、お互いの文化的な時間を掛け合わせて一緒に更新してみたいという想いが出発点にあるんです。

なぜ「オペラ」なのか？

—— そこから、どのように企画を考えていったのでしょうか？

富塚 私が最初に「友の会」へ見学に行った日は、たまたま、学芸会のひびきとして行われていた「ブラタナ」教室の発表会だったんです。そこでとても驚きました。先生の前に生徒が並んで……というのにはよくある、ブラタナ教室と一緒に、当然盲ろう者にはあらゆることを通訳しないといけない。

—— なぜ「オペラ」だったのですか？

富塚 その発表会を見ながら、すごいなと思うと同時に、なぜブラタナという「型」のある踊りをやるのだろう、とも感じたんです。それは、その人たちが踊りたいときに自然と身体が動かすような気持ち良さとは必ずしもリンクしていないかもしれない。きつと内側から湧いてくる踊りがあり、私はそれを表現したときの気持ち良さを知っているのだから、それを共有したいと思いました。

なぜオペラかと言えば、私が小さい頃からオペラの演出に関心があったという個人的な理由もあつた。音楽やダンスや美術の勉強をはじめたのは、いつか自分なりの新しいオペラの形式をつりたいと思ったから。その欲求は前からあったのですが、盲ろうの人たちとの出会いを通じて、そこで何か面白いことができたらしいなと感じました。

—— 舞台上がするのは盲ろうの方たちなのですか？

富塚 舞台上がりたい人には上がってもらいたい。でも、それはいわゆる健常者も良、盲ろうの人たちにはやりたいことをしてほしいと思っっています。それは観客の誘導とを合わせる係、あるいは観客かもしれない。記録スタッフでも衣装スタッフでもない。というの。以前、次のフェスに向けて「何をやりたい」と盲ろうの方に聞いたとき、「映画をつくりたい」と言われて驚いたんです。私は無意識にその選択肢を外していたんですが、その人たちに完成した映像を見られなくても、重んじたいのか「カット」と言いたいのか、チー

盲ろう者と「東京盲ろう者友の会」とのワークショップ

「盲ろう者」とは、「目（視覚）と耳（聴覚）の両方に障害を併せ持つ人」のこと。日本全国に約1万4000人ほどと推計されている*1。

「盲ろう者」において、視覚と聴覚の障害の程度には、様々なグラデーション（全く見えず聞こえない人、見えにくく聞こえない人など）があり、一人ひとりの状況や、それぞれに合ったコミュニケーションや支援の方法は異なる。また、盲ろう者になる経緯も人によって様々である。

「東京盲ろう者友の会」によると、障害の発症時期により次の4つに大別されるという。

- ① 先天的、あるいは乳幼児期に視覚と聴覚の障害を発症する「先天盲ろう（早期盲ろう）」
- ② まずは盲（視覚障害）となり、その後聴覚障害が加わった「盲ベースの盲ろう」
- ③ まずはろう（聴覚障害）となり、その後視覚障害が加わった「ろうベースの盲ろう」
- ④ 成人期以後に視覚と聴覚の障害を発症する「中途盲ろう（後期盲ろう）」

盲ろう者のコミュニケーション方法には、「手書き文字」（盲ろう者の手のひらに指先などでひらがなやカタカナなどを書いて伝える）、「手話」、「触手話」（手話をする話し手の手に、盲ろう者が触れて読み取る）、「指文字」（ひらがなやローマ字表記を指の形で表す話し手の手に、盲ろう者が触れて読み取る）、「点字」など多岐にわたる。

「東京盲ろう者友の会」は、そうした盲ろう者の自立と社会参加を支援すると共に、通訳・介助者派遣や通訳・介助者養成も担っている*2。

「東京都盲ろう者支援センター」での富塚による「アルミホイルと遊ぶ」のワークショップは2020年7月30日の午後、2時間かけて行われた。当初は春の開催を予定していたが延期になり、参加人数も6人に絞られた。感染予防対策として、共同制作や作品を手で鑑賞する交流はできなくなり、一人ひとりが個別に作業し、しかも講師の富塚が話す言葉が多くなり、簡潔な内容にしてほしいというオーダーだった。



ワークショップを終えて。一番左が富塚。左から4番目の方が身についているのが「こぼれたポップコーンのための器」

当日の様子は富塚がインタビューで語った通りだが、最初に「好きなものを入れる器」をつくってもらい、その後、自由制作という流れを取った。「器」として生まれた作品からは、視覚に障害を持つ彼らが、モノをどのように捉え、どうつくりたいのかという造形観が伝わってきたという。

富塚がアルミホイルを使う理由のひとつに、触れば触るほど形が変わる性質がある。造形物は形を失い、押しつぶされ、最後は団子になって床に落ちる。ワークショップの会場には団子になったアルミホイルがコロコロ転がる。この不定形に変化し続けるアルミホイルが様々なメタファーを生む。新作オペラ戯曲「ローラ・ブリッジマンが見た夢」にもその特性は生かされ、「夢」をつなぐ装置として機能している。（畑まりあ）

—— 参考文献

- *1 「知ってください 盲ろうについて」認定NPO法人東京盲ろう者友の会、2019年7月20日第4版発行、p.2
- *2 東京盲ろう者友の会 <http://www.tokyo-db.or.jp>



きむらだいに「京都大学名誉教授、専門は人類学、コミュニケーション論。1990年京都大学大学院理学研究科博士課程修了、理学博士。著書に『共在感覚—アフリカの二つの社会における言語の相互行為から』（京都大学学術出版会、2003年）、「揺らぎの意味論」（NTT出版、2017年）、「見知らぬものとの出会う—フーコク—」などの相互行為論（2018年、東京大学出版会）等がある。現在、『楽観視の相互行為論』を研究中。

—— 参考文献

- * Helmut C. Space and society in a Batak longhouse. In Jackson, M. (Ed.) Things As They Are. New Directions in Phenomenological Anthropology. pp.126-146. Bloomington & Indianapolis: Indiana University Press, 1974.
- * 渡辺潤「メディアのコミュニケーション、筑波書庫、1990年

△で何かをつくらせてみたいという欲求がある。得意分野も発揮できるし、衣装や舞台美術や照明など、かわり方の可能性がたかさんある。総芸術家のオペラは、その点でも「一緒に」に向いていると思いがちです。私がつくりたいのは、どの役にも言える方がかわることが前提となっている文化芸術の場なんです。

新しい鑑賞を考える場所

——一方の佐藤さんは、建築家として作品に参加しています。

佐藤 今回はこちら(富塚の愛称)との協働ですが、彼女はオペラを、僕はオペラハウスをめぐらそうと考えてました。二人の関心は、実は微妙に違っていて、ちよとはこれまでも協働してきて、そのひとつが2017年のTURNフェスに「あわい」という名義で参加してつづいた「みんなの楽屋」という作品です。これは、フェス会場の東部美術館(以下、都美)の展示室に、会期の3日間、楽屋というみんなが過す場所をつくるというものでした。きっかけには、2016年のTURNフェスを観客として見たとき、展示室の使い方に驚いた経験があります。僕はずっと美術館の空間について考えているのですが、特に関心があるのが、アートプロジェクトという視覚中心ではない「アートの形式が現れたとき、それを止める場として従来の真つ白な展示空間が適しているのか」という問いでした。都美の公募展示室は、フックが掛けられるように穴が空いた有孔板の壁で、床にはカーペットが敷かれていて、既存の美術館の価値観ではあまり評判の良くない仕上げだった。でも、見方を変えたら、そこは美術館の外にあった物語を招き入れるうえで優れた空間だと感じて、感銘を受けたんです。「楽屋」はその感動を具体的な場に落とし込んだものでした。

——視覚以外の感覚への注目も、今回のオペラにもつながります。

佐藤 まさに「盲ろう者の」ことを考えるとき、視覚も聴覚も優先できない。一番よいと考えるのができるのか。その課題設定に「普通」ともいえないオペラハウスを、美術館に真剣に持ち込むことを考えたら、どんなことが起きるのか。そんなことがからオペラハウスの発想は出てきました。

聞かす、キラキラも見えないから、伝わらないかなって思うのは勝手な偏見で、臨場感は通訳者を通じて少すす伝わっています。

——「フワフワ」の感触があったんですね。

富塚 そうですね。たとえばある人は、「ほれたポップコーンのための器」をつくりました。盲ろうの人にとってポップコーンは取っつきにくい手がつくつかつつかのまにかポップコーンほれたら、食べたくても避けてしまふ食べ物です。そういうところから、盲ろうの人たちが日々感じている「フワフワ」から、盲ろうの人たちが日々感じている「フワフワ」を再現しようとしたんです。彼らの世界をシェアしてもらえたような感覚がありました。工夫が必要だったのは、作品の伝え方です。「口対策でお互いのつくったものを触って鑑賞する」とかできないので、たとえばある人が花をへんたから、「それは掌(てのひら)の大きさです。可愛いですね」「蝶々(ちょうちょう)が飛んできてさうきりかいてます」とか、できるだけ具体的な大きなや印象を言葉で説明するようにしました。そうした小さな積み重ねでお互いが内側持っているイメージを誰かとかかわり合う楽しさや味わってもらえたように感じました。「ごらにはどう見えますか?」とイメージを投げかけながら交流するところができて、とても充ちました。

——友の会からは、今後継続したいと言われたそうですね。

富塚 参加者が見るからにキキキして、頭をミルミルを巻いたり、踊ったりしている様子は、スタッフにとっても新鮮に映りました。盲ろうの人たち自身からも、「次はこんなものをしたい」「今度はもっと大きなものをしたい」と、前向きな反応がありました。実は「フワフワ」前は、盲ろうの人たちが見ている風景と違って、彼らの肉体的なイメージにタッチできていない感じがしたんです。でも、「フワフワ」を経た、この人たちが一緒に何かをやって生きていけるという確信が持てた気がしています。

障害者の世界を健常者に翻訳する

——そうして実践と並行して、お二人はアーティストやエンジニアなど、様々な立場の人が障害について

る劇場は、日本のお弁当を食べつつ歌舞伎を見るみたいに、一種の社交場で、多様な振る舞いがある空間だった。それが近代以降、集中した鑑賞に特化した空間に変化するのですが、やがて大衆娯楽に言え、その意味で今回のオペラハウスをめぐる試みは、近代の次の鑑賞の形を考へるものでもあります。

教育が支える文化

——フェスでは「ローラ・ブリッジマンが見た夢」という演目を予定していました。

富塚 森くんをはじめとして、盲ろう者と話す、その知的な魅力に驚かれます。創造的なエネルギーがあり、ユモアもあり、吸引力のある言葉にあふれている。何卒の文化の土台を支えているのかと考えると、「教育」ではないかな。私達は自分の学ぶ言語について、そこまで意識的には考えない。しかし盲ろう者は、一人ひとりの身体に合わせ、非常に丁寧な言葉の獲得をしていく。積極的に伝えなければいけないという意識があるので、自分の気持ちをほつきり伝える習慣があり、主体性があるように感じます。

そんなことを考えていたとき、名城教育大学で視覚障害教育を専攻している三科聡子さんを通じて「先天性盲ろう」という人が日本では、まだ社会的に明確な定義がなされていない状況にあること、そしてローラ・ブリッジマンの存在について知りました。彼女は視覚と聴覚に加えて、嗅覚も持っていない女性です。しかし、非常に魅力的な人だと感じました。そこで戯曲は、ヘレン・ケラーの家庭教師として有名なサリバン先生師でもあったローラ・ブリッジマンをモチーフにしようと思ったんです。



ローラ・ブリッジマンの肖像(16歳頃) ダゲレオタイプ 1845年頃 Courtesy of Perkins School for the Blind Archives

いて考える。「TURNラボ」という研究会にも参加されています。新しい発見がありましたか。

佐藤 「ロラ」のあと、「TURNラボ」に参加するなかで、僕にも変化が生まれています。その研究会には「Ubitone (あふん)」「OTON GLASS (おとんがらす)」「Ontena (おんてな)」「アノノ」の4つのユニットを制作しているヘレン・ケラーやサリバンが参加しているんです。これはそれぞれ「音声言語を指図文字に交換する(Ubitone)」「書かれた文字を音声言語に交換する(OTON GLASS)」「音を振動や光といった連なりイメージに変換する(Ontena)」などの機能のユニットです。

もろろ、それはどれもこれも意識のある装置ですが、そこにあるのは、「健常者の感じている世界をどのように障害者に翻訳するか」という問いだと思っています。一方で、ちよりがアルミホイルのフワフワを通してちよろとした、そして、実際に体験したのは、「障害者の世界をどのように健常者に翻訳するか」という考え方を思っています。そうした自分たちの立ち位置が、「TURNラボ」への参加で見えてきました。

——逆向きのアプローチがある、と。

佐藤 当初、オペラやオペラハウスと言っていたときは、僕らも健常者が楽しんでいる文化を障害者にもっと楽しんでもいいのかなという軸で自分たちの取り組みを捉えていたと思います。しかし、ちよりのフワフワは、アルミホイルがまきまきに反対方向の伝達を拒む媒体になっていた。ならば、そうした逆向きのエン지니어リングに対してより自覚的になって、僕もオペラハウスのあり方を考えてみたいという今を思っています。

とみかか・えみ、ディレクターとしてアートプロジェクトやパフォーマンス公演企画運営。京都市京セラ美術館「フワフワ・キムラ」にて、TURNフェス2015年から参加。TURNフェスでは「あわい」(富塚絵美・佐藤慎也共同監修)による、楽屋のような空間を美術館のなかにつくるための楽屋を制作。TURNフェスでは、言葉を使わない空間「ミニクッション」を行う。光の広場等を発表。TURNフェスでは盲ろう者との対話を通して、「眼」をテーマに空間を構成した。

——また、画家の秋場康平さん今回の作品に参加しています。

富塚 盲ろう者と一緒につくるオペラはこれら落としての演目なので、魅力的なボクスターが必要だと思いが、声をかけたのが秋場さんでした。理由は、目が見える私にも秋場さんの絵は誰を描いているのか分からない(笑)。絵になる誰を描いているのか分からぬに、制作中は生のモデルを前にして描くことを好みます。いつも明確なモチーフと向き合いつながりながら描くことを知っていたので、今回は彼に写真を見せ、それをもとに絵を描いてほしいと頼みました。

そこには、でこぼこした油絵があれば、触って鑑賞することができるという狙いもありました。ただ、ローラに向き合って制作を続けるなかで、秋場さんのなかにも今までは違った感覚が芽生えているように、絵がどんどん変わっていききました。彼とは、今もどんな絵がふさわしいのかを考え続けています。

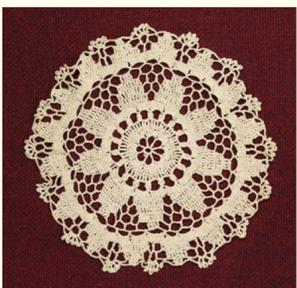
「世界をシェアした」という確信

——TURNフェス6の中止決定後、7月にはちよともフェスに向けて行う予定だったアルミホイルを使うフワフワを「友の会」で実施しました。やられてみて、いかがでしたか?

富塚 じつは当初、「友の会」でこんなことをするのがいいの、だいたい悩んだんです。でも、これまでの私の仕事を見た「友の会」の人から、アルミホイルならみんな知っているし、アルミホイルと遊ぼう」というタイトルなら参加したくなるんじゃないかと提案をされました。それはとても嬉しかったのですが、それでも、視覚や聴覚の要素なしで、言葉だけで内容を説明できるのか?不安でした。

また、「盲ろう者」として、その状態はそれだけで、生まれつき盲ろうの人にもいれれば、少しだけ見えて聞ける弱視難聴の人もいます。ただ、そう考えると、むしろいつも通りにやればいいのかもと思えて、フワフワがはじまる前に、空間そのものを動かすための勢いで、業務用の巨大なアルミホイルを10メートル以上出し、自分の身体に巻きつけたりして、非日常な感じを演出しました。すると、だんだん通訳介助者さんを通して、参加者が「何だかいつもと違うことが起きている」と感じてくれていることが伝わってきました。音も

富塚 さっきのフラダンスもそうですが、障害者が頑張って健常者の文化についていこう努力する場や時間は、今でもたくさんあります。ただ、盲ろうの人たちが盲ろうの人たちとして楽しんで生きている時間には、まだあまり目向けられていない。それはとてももったいなさく思っています。私はその部分をシェアしてほしくて、ちよろと交流をしながら一緒に私たちの文化を豊かにしていきたい。



ローラ・ブリッジマン作 かぎ針編みの敷物 テキスタイル 19世紀 Courtesy of Perkins School for the Blind Archives ローラも多くの魅力的な作品を残している

——そして、いつかオペラの上演へ。

富塚 急いでいるわけでもないし、どうしても仕上げないといけないというでもないんだというけれど、今はとにかく、盲ろうの人たちの文化をもっと学びたい。盲ろうの人たちが自分のなかに普通にいる状態になれたら、そのとき、自分のつくめるものは盲ろうの人たちにもっと開かれたものになるはず。最近、自分でも手話の勉強をはじめたのですが、そうしたことも含めてその文化にもっと浸りたいし、一緒にいる時間を増やしていきたいと思っています。

さとうしんや、日本大学理工学部建築学科教授。アートプロジェクトの構造設計、ツアー型作品の制作協力。また、なか演劇作品のドキュメンタリー等、建築に関与。美術、演劇制作にも参加。アーツ千代田2001「改修設計」(シロスタジオ共同設計)、2010年「みんなの楽屋」(あわい)、2017年、TURNフェス、「八戸市新美術館」建設アドバイザー、運営検討委員会委員(西澤夫建築事務所、タカハシスタジオ設計共同設計、2017年開館予定)等。

新作オペラのポスターのための肖像群



秋場康平 《ローラ・ブリッジマンの肖像》2020年

上演するオペラのポスターのため、絵が必要だと考えた富塚が声をかけたのが、画家の秋場康平(1982年生まれ)だ。その理由について富塚は、絵の抽象性にもかかわらず必ず具体的なモチーフを扱う点や、絵が立体的である点を挙げている。秋場自身も、知的障害者を支援する施設で働いている。

当初はローラ・ブリッジマンの写真を前に描いていた秋場だが、次第にその方法に疑問を感じるようになったという。その後は、勤務先での経験も制作のなかに入り込み、徐々に絵が変化していった。そして、秋場が最初に絵の決定的な変化を感じたというのが、赤と黒を基調にした一枚(上段左)だ。彼はこの過程について富塚に、「普段は視覚的な技術で描いているが、視覚を持たないローラを知るにつれて絵が変化したかもしれない」と話したという。

しかし、その試行錯誤は進行形で、秋場は現在も絵を描き続けている。「秋場くんは、自身の『描く時間』を、盲ろう者や知的障害のある方の『時間』とリンク可能なものとして捉えているように感じる。すでに10枚くらいの絵を仕上げられていて、このテーマの奥深さを実感している」と富塚。このオペラの経験は、秋場という若い画家のなかにもひとつの「TURN」を生み出しているのかもしれない。

新作オペラ戯曲「ローラ・ブリッジマンが見た夢」

序幕【夢を編む】

—— 沢山のローラ・ブリッジマンが登場し夢を紡ぐ。

第一幕【夢の発掘】

—— 世界中のあちこちで夢のかけらが発見され、それをよく見ようとして触っていたら、そのかけらは形を失ってしまふ。

第二幕【夢の拡散】

—— ココロダンス。あちこちに団子が転がっている。人々はココロ転がしては団子をつくり、歩けば団子が当たり、団子はココロ転がる。チリになった夢のかけらが土に還っていく。

第三幕【夢の残り香】

—— 夢のかけらを発見したときの喜びが忘れられず、夢の手触りを追い、想いを馳せる。

第四幕【夢を織ろう】

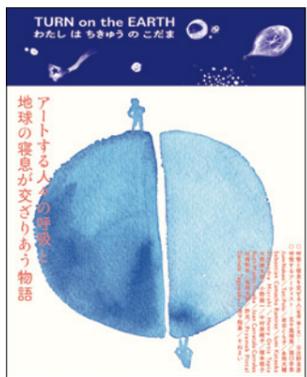
—— 不確かだけれどふわりと確信した「夢」との再会。次第に夢は体に溶け、じんわりと内側を温めてゆく。夢のかけらを纏った静かな宴には始まりも終わりもない。

富塚が今回のオペラのために書いた戯曲が、「ローラ・ブリッジマンが見た夢」だ。戯曲は全4幕。かつて実在した人物ローラ・ブリッジマンと、彼女が「夢のかけら」でつくった団子をめぐめる物語。各幕は長くても1000字強の文章で綴られており、全体としてとても短い。セリフもなく、むしろ出演者の振る舞いが魅力的になるような物語として書かれた。ここには、盲ろう者と交流し、「盲ろう者と」一緒にできるオペラとはどんなものか?」を考えた、富塚の思いが託されている。

ローラは1829年、アメリカ生まれ。2歳で猩紅熱のため盲ろうとなり、嗅覚や味覚にも障害を抱えていた。7歳10歳で視覚や聴覚に障害を持つ人のための「パーキンス盲学校」に入ると、初代校長サミュエル・ハウの教育により、触覚を通じて言葉を学習。「目・耳・舌」の三重苦にありながら、他者と会話することができた世界ではじめての人もいられる。その後、同校で裁縫などの教育の手伝いをしてきた彼女が50歳のときに出会ったのが、ヘレン・ケラーの家庭教師として知られるアン・サリバンだ。アンはこの出会いを機に指文字を覚え、その会話の体験がのちのヘレンの教育に大きな影響を与えたとされる。盲ろう者の力強さの背景に「教育」があると考えていた富塚は、ローラが存在を知り、文献や写真に見られる彼女の人物や佇まいに惹かれたという。

作=富塚絵美

BOOK REVIEW



『TURN on the EARTH
わたしはちきゅうのこども』
東京藝術大学出版会

展覧会「TURN on the EARTH わたしはちきゅうのこども」(2020年7月23日～9月6日)東京藝術大学美術館の開催に合わせて、2016～19年に海外で展開した「TURN」交流プログラム「の活動をまとめた書籍を刊行した。

p.67-72 作品掲載

ひびのかつひ「東京藝術大学美術学部長、美術学部先端芸術表現現科教授。アートを社会のなかで機能させる手法を試み、地域や多業種の人々の共同プロジェクトを展開。2015年より「TURN」の監修を務める。

2020年10月4日

気持ちの距離は球体の上にある

日比野克彦

「TURN」監修者／アーティスト

日本における道の距離は、東京の日本橋に起点がある。距離は基準点があることよって測れる。30年ほど前にシベリア鉄道でヨーロッパに行った時、ロシア号の車窓から100メートルおきにキロポストという標識が線路脇にあった。そこには首都モスクワからの距離が記されていた。数字の大きさにユーラシア大陸の広大さを実感した(地球の円周が約4万キロなのに、6000何キロなどという数字を目にした時、もはや直線ではなく円弧状の線を想像していた……)。また、その距離を表す数字は首都に対する憧れ(荒涼とした風景との落差がある都会の風景)のエネルギの度合いともいえるし、逆に、都会にはない大自然の豊かさの数値ともいえる。

距離が遠いから見えない、わからない、知らないという思考のプログラムと、距離があるから見たい、知りたい、わかりたいというプログラムがある。そのどちらの間違っているか。距離が遠くなればなるほど、会えなくなるけれども会いたい気持ちは強くなる。きつこの気持ちの距離も、地球の距離と同じように球体の上には存在しているような気がする。だからきつと、距離が離れていけば行き着ける、もう一つのルートがあるに違いない。

社会の動向

「TURN」では2020年6月中旬から8月にかけての、新型コロナウイルスをめぐる主な出来事を時系列で振り返る。

▼6月11日の「東京アラート」解除後も、都内の新規感染者は増加傾向。特に、いわゆる「夜の街」への注目や批判が高まる。19日、政府は観光を含んだ都道府県境をまたぐ移動の自粛を全国的に解除。また、ガイドライン遵守を条件に接待を伴う飲食業への休業要請も撤廃、イベントの開催条件も緩和。プロ野球が無観客で開幕。24日、西村康稔経済再生担当相が従来の専門家会議に代わる新組織の設置を発表。26日、国内の新規感染者が1カ月半ぶりに100人超。30日より新宿の劇場で行われた公演で集団感染。

▼1日における感染確認が、7月2日には東京で2カ月ぶりに1000人を、3日には全国で2カ月ぶりに2000人を超える。以降、7月中旬に都内、国内共に増加。6日、医療に加え経済など幅広い専門家を含む「新型コロナウイルス感染症対策分科会」が発足。12日、新型コロナウイルスの影響で開業が遅れていた北海道白老町のアイヌ文化施設「民族共生象徴空間(ウポポイ)」開館。13日、米大陸を中心に感染が拡大している状況を受け、世界保健機関(WHO)のテドロス事務局長が、「多くの国が誤った方向に向かっている」と警告。15日、東京の警戒レベルが4段階中で最も深刻な「感染拡大警戒」に。22日、東京以外を対象に、旅行代金の35%補助などを含む観光需要喚起策「GOTOトラベル」キャンペーン開始。28日、国内の死者が千人を超える(クルーズ船除く)。29日、全国で1日の感染者がはじめて千人超。岩手県で初感染者が現れ、全都道府県で感染者が確認。全国的に梅雨が

明けはじめ、本格的な夏となるも、小中高校の夏休みは大幅に短縮。各地の海水浴場の開設を中止する動きが相次いだ。隅田川花火大会(7月11日)中止、フジロックフェスティバル(8月21日～23日)延期など、夏の大イベントも実施されず。

▼8月1日、1日の感染確認が国内では2日連続で1500人超、都内では過去最多の472人。5日、日本医師会がPCR検査や抗原検査の充実を求める緊急提言。6日、東京の小池百合子知事がお盆の帰省を控えるよう都民に呼びかけた。一方、西村経済再生相は帰省自粛について国として「一律に求めるものではない」と述べた。8日、お盆休み初日、各交通機関では例年に比べ入出が大幅減。10日、第92回選抜高等学校野球大会の中止を受け、同大会に出場予定だった32校が1試合ずつを行う「2020年甲子園高校野球交流試合」が6日間の日程で開幕。アメリカで累計の感染者が500万人超(死者数16万人超と共に世界最多)。この時期、ヨーロッパで感染再拡大、防止措置が広がる。17日、4月からの国内総生産(GDP)発表。実質伸び率は年率換算でマイナス27.8%、リーマンショック後を超えて戦後最悪に。20日、新型コロナウイルス対策分科会の尾身茂会長が、第二波の流行について「だいたいピークに達したとみられる」と見解。27日、都は飲食店に対する午後10時までの営業時間の短縮要請を、23区内に限り9月15日まで延長決定(23区外は8月31日で解除)。

(杉原環樹)

編集後記

本誌に向けて寄せていただいたテキストを読んで、「距離と交流」にまつわる物理的な状況、概念的なことから私的な国内外の現場の話まで、「読者として多くの異なる次元の事柄を想起させられた。そしてそれらを表そうとしたときの文章の出だし、リズム、章立ての仕方、語り方も、実に多様であることに気づいた。

物理的な距離とは裏腹に、心的距離は遠くも近くもあり得る。一般化できないそれぞれの経験の共有こそが、社会の「多様性」を守る営みにも感じられた。どのようになっているのかを多くの人たちと共有することができるのか。文章を読み返すたびに考えていた。

事柄に含まれる行間やグラデーションを、どのように読み取るのか。一人ひとりがそれを思考したときに思い起こす「ト」や感情は、それぞれ異なるのだらう。そのことを想像する「ト」。そこに、「複数性」を社会に維持させていくための出発点があるのかもしれない。

(畑まじあ)

TURN

「TURN」交流プログラム「……アーティストと、福祉施設や社会的支援を必要とする人々が時間を重ねて交流し、共働活動するプログラム。また、アーティストによる、社会や日常で意識化されていない課題への気づきを目的としたリサーチも行う。

「TURN」LAND「……福祉施設や団体が、アーティストと共に参加型のプログラムを企画する。それぞれの場所に備わった従来の機能に、地域に開かれた文化施設としての役割が加わり、市民と共に日常的に「TURN」を実践する場を創る。

「TURN」FEST「……「TURN」交流プログラムや「TURN」LAND」を実施する、多様なアーティストや交流先の活動が一堂に集まるフェスティバル。作品展示やワークショップ、トークイベント、オリジナルプログラムなど様々なコンテンツを通じて「TURN」を体感できる。

「TURN」ミーティング「……「TURN」の可能性を共有し、語り、考え合う場。参加アーティストや交流先などの関係者と共に、各分野で活躍するスペシャリストを招き、様々な視点から「TURN」を考察する。

『TURN JOURNAL』のバックナンバーは、こちらからご覧いただけます



TURN JOURNAL
SUMMER 2020
—ISSUE 04



TURN JOURNAL
SPRING 2020
—ISSUE 03



TURN JOURNAL
SPRING 2019
—ISSUE 02



TURN JOURNAL
2018

TURN公式ウェブサイト = turn-project.com

監修＝森司/アーツカウンシル東京
編集＝永峰美佳/杉原環樹/畑まじあ/アーツカウンシル東京
田村悠貴、山口麻里菜/特定非営利活動法人「Art's Embrace」
デザイン＝星野哲也
印刷＝株式会社アトミ
発行＝公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28
九段ファーストプレイス8階
TEL＝03-6256-8435 / FAX＝03-6256-8829
Email＝info@turn-project.com

©2020 Arts Council Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
All rights reserved

TURN JOURNAL AUTUMN 2020 — ISSUE 05
2020年10月30日発行

主催＝東京都/公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京/特定非営利活動法人「Art's Embrace」/国立大学法人東京藝術大学
監修＝日比野克彦
「アーティスト/東京藝術大学美術学部長、先端芸術表現現科教授」
プロジェクトディレクター＝森司
「アーツカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長」



「TokyoTokyo FESTIVAL」とはオリンピック・パラリンピックが開催される東京を文化の面から盛り上げるため、多様な文化プログラムを展開し、芸術文化都市東京の魅力伝える取組です。「TURN」は、その一環として展開しています。

